

IV-113

距離とゾーンからみた街区公園の利用特性

大同工業大学 学生会員 児玉 陽子
大同工業大学 正会員 舟渡 悦夫

1. はじめに

街区公園は面積規模が小さく、利用者の多くがその土地に馴染みの深い近隣住民であり、公園に近いということが公園利用の大きな要因と考えられる。しかしながら、公園に近いということのみが公園利用を決定しているとも思われない。

そこで、本研究では街区公園の利用特性が、居住者と公園の距離や街区の形態（ゾーン）などの地域的な環境条件によってどのように変化しているのかを検討することにした。

2. 調査方法

①調査公園の選定：表-1 に示すように、「手づくり公園（地区住民が何らかの形で公園づくりに参加した公園）」「学校公園（小学校の校庭に街区公園が隣接し、境の柵がない公園）」「公園愛護会のない公園」の3種類の公園を、公園面積がほぼ同等であるように留意し、名古屋市内から選定した。なお、調査公園周辺には公園面積の大きな公園がないことを原則として選定している。

②アンケート調査の方法：調査公園から半径 250m 程度の範囲を調査対象地区とし、調査対象世帯が広く分布するようにサンプリングし留置法によるアンケートの配布・回収を行った。また、各調査地区内を2~4ゾーンに分割し、ゾーン別分析ができるよう配慮した。

3. 調査の結果と考察

1) 距離と公園利用特性との関連性の検定

表-2 は、居住者と公園までの最短経路距離（以下、距離と表す）と公園利用特性に関する各質問項目との関連性についてのカイ二乗独立性の検定を行った結果を示したものである。

①地区全体の集計：「公園の利用頻度」「公園の必要度」「公園清掃体験の有無」「今後の公園清掃の意向」などの質問についての傾向は、距離との関連性が有意にみられる（パターンⅠ）。しかし、「公園愛護会への参加」「手づくり公園への自分の意見の反映」「手づくり公園の話し合いへの参加」「手づくり公園の管理運営への参加」など、より具体的な活動への参加を問う質問項目については、距離との関連性が見られないことが分かる（パターンⅡ，Ⅳ，Ⅴ）。

②公園地区別の集計：上記の質問項目全てにつ

表-1 公園調査地区の諸元

公園種類	公園名 (ha)	調査地区の概略図	No. 1	2	3	4	5	6
手づくり公園	0.29		1 隣	2 有	2/3			
汁谷公園	0.37		1 隣	2 傍				迂
学校公園	0.25		1 隣	2 傍	有			
会所公園	0.24		1 隣	2 傍				
愛護会のない公園	0.29		1 隣	2 傍				

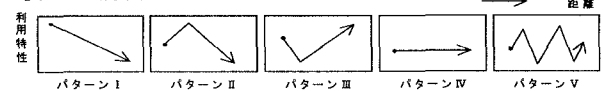
隣：公園近隣
遠：公園からやや遠い
工：工場地を含む
No.3: 片側車線数を表す

傍：公園近傍
校：小学校・中学校あり
団：住宅団地あり
迂：迂回の必要あり

表-2 距離と公園利用特性の関連性

地区名		全	体	江	西	汁	谷	樓	会	所	白	鳥	西	一	社
質問		Sig	P	Sig	P	Sig	P	Sig	P	Sig	P	Sig	P	Sig	P
1	公園の利用頻度	**	I	*	II		V	**	III		I	**	I		I
2	公園の必要度	**	I		I		II		II		II	**	I		III
3	清掃体験の有無	**	i	*	I		II	*	II	*	II	**	III	I	I
4	今後の清掃の意向	**	i		II	**	II	*	II		II	**	I		III
5	愛護会への参加		IV		II		II		II		IV		III		III
6	自分の意見の反映		II		II	*	II		II		II		V		III
7	話し合いへの参加		II		II		II		II		II		I		I
8	管理運営への参加		V		V	**	II		II		II		I		IV

Sig: クロス表の有意水準 (**: 0.01 * : 0.05 で有意)



キーワード：街区公園・利用特性・距離・ゾーン

連絡先：〒457-8532 名古屋市南区白水町4 0

Tel : 052-612-5571

Fax : 052-612-5953

いて多様な傾向を示しており、距離が遠くなるに従い利用特性が低減するという単純な傾向を得ることができなくなっている。特に、公園に最も近い 100mまでの距離帯が 100m～200mまでの距離帯より利用特性が低いというパターンⅡは、『公園近くの住民の中には、公園からの騒音・ゴミ問題などにより公園に悪い印象を抱いている』ことが反映された結果と解釈できる。

この点については、「公園の改善点」「公園利用者のマナー」に関する自由記述の意見の中でも同様の結果が得られている。

2) 距離別にみた検討

ここでは、全地区データを用いた結果から検討を行う。

- ①利用頻度：街区公園の標準誘致距離は 250mと設定されているが、図-1(a)に示すように、「毎日～週に数回」という多利用層は、200mまでの距離帯で高く、距離が遠くなるに従い公園利用頻度が低減するという典型的なパターンⅠの傾向といえる。

- ②清掃体験：図-2(a)より、公園の清掃体験についてみると、利用頻度と同様にパターンⅠの傾向となっている。

- ③話し合いへの参加：図-3(a)から、「手づくり公園をつくる時、その話し合いに参加したいかどうか」についてみると、参加したいの割合がパターンⅡとなっており、100mまでの距離層の人は 100～200mの距離層よりも参加率が6ポイント低くなっているが、200m以上の距離層との差はみられない。

3) ゾーン別にみた検討

各公園の利用特性をゾーン別にクロス集計すると、その傾向は距離とは違い一定でないことが分かる。ここでは、表-1に示した公園のゾーン区分に従い、榎公園を例とした分析結果について述べる。

- ①利用頻度：図-1(b)に示すように、公園利用頻度は頻繁に利用するゾーン 1, 2 と、余り利用しないゾーン 3, 4 に2分される。ゾーン 3 は、片側 3 車線の国道 22 号により分断されており、さらに小さなどんぐり広場がゾーン内に散在しているため公園や広場の競合があると考えられる。また、片側 2 車線の県道で分断されたゾーン 4 の利用頻度が他ゾーンに比べて低いのは、このゾーンが城西学区に位置しており、榎公園が榎小学校の学校公園であり、違う学区であるということが大きく影響しているといえよう。
- ②清掃体験：図-2(b)からゾーン別の清掃体験をみると、ゾーン 1 と 2 では約 60%の同じ体験率となっているが、幹線道路で分断されたゾーン 3 では体験率が半減し、他学区のゾーン 4 では体験率が 0 となる。
- ③話し合いへの参加：図-3(b)に示したように、手づくり公園への話し合いの参加意識については、公園近隣のゾーン 1 より、少し離れた近傍のゾーン 2 の方が参加意識が高くなっている。さらに、ゾーン 3, 4 についても参加意識の割合が一定程度存在することが確認され、手づくり公園への参加意識は距離別やゾーン別とはそれ程関連のない要因（例えば、ボランティア）が作用することが読みとれる。

4. まとめ

以上の結果から、街区公園利用者にとって街区公園までの距離が与える影響よりも、学区の相違や道路の分断などによるアクセス障害などの地域特性が与える影響の方が、非常に重要であることが分かった。また、公園に対する具体的活動は、公園近隣よりも公園近傍の方が意識が高いことも分かった。

今後は、距離別分析のみならず、地域特性をも考慮した多要因からの分析を進めることにより公園利用者の意識を探る予定である。

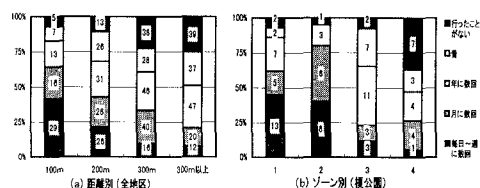


図-1 公園の利用頻度

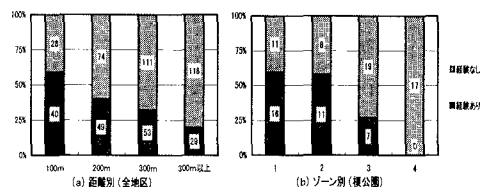


図-2 公園の清掃体験

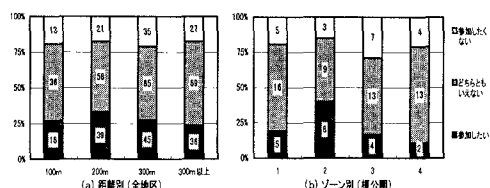


図-3 手づくり公園の話し合いへの参加